

東文易解

前編

特36

260

255

24

013334-001-8

特36-260

東文易解

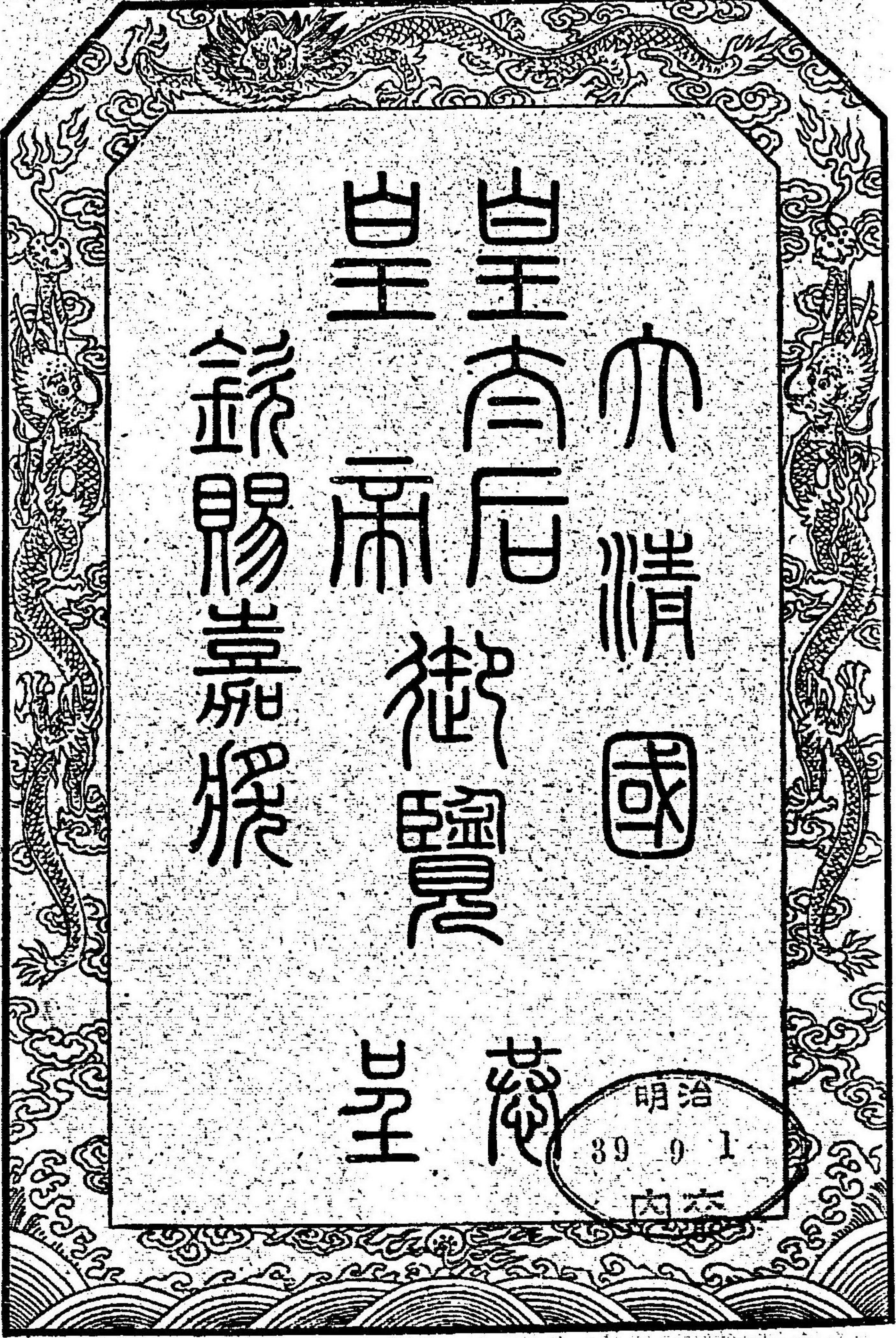
大矢 透/著

1冊(前52丁)

M39

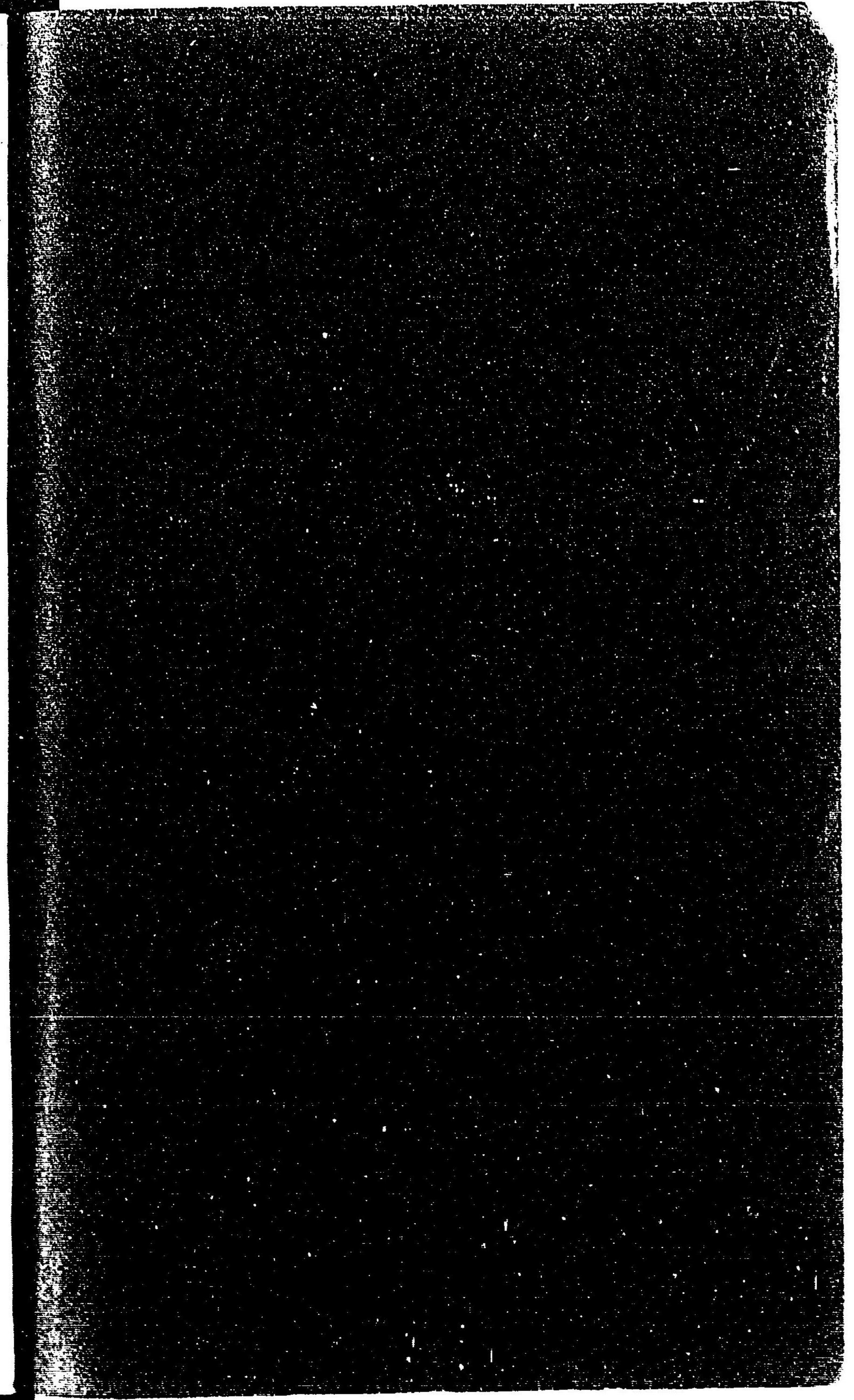
AAK-0741





大清國
皇帝御覽
錄賜嘉獎

明治 39 年 9 月 1 日 丙午



文部省國語調查會補助委員 大矢透 著
東京外國語學校教師 金國璞
東京高等商業學校教師 張廷彦 同校

東文易解

前編

大日本東京

泰東同文局

東文易解

凡例

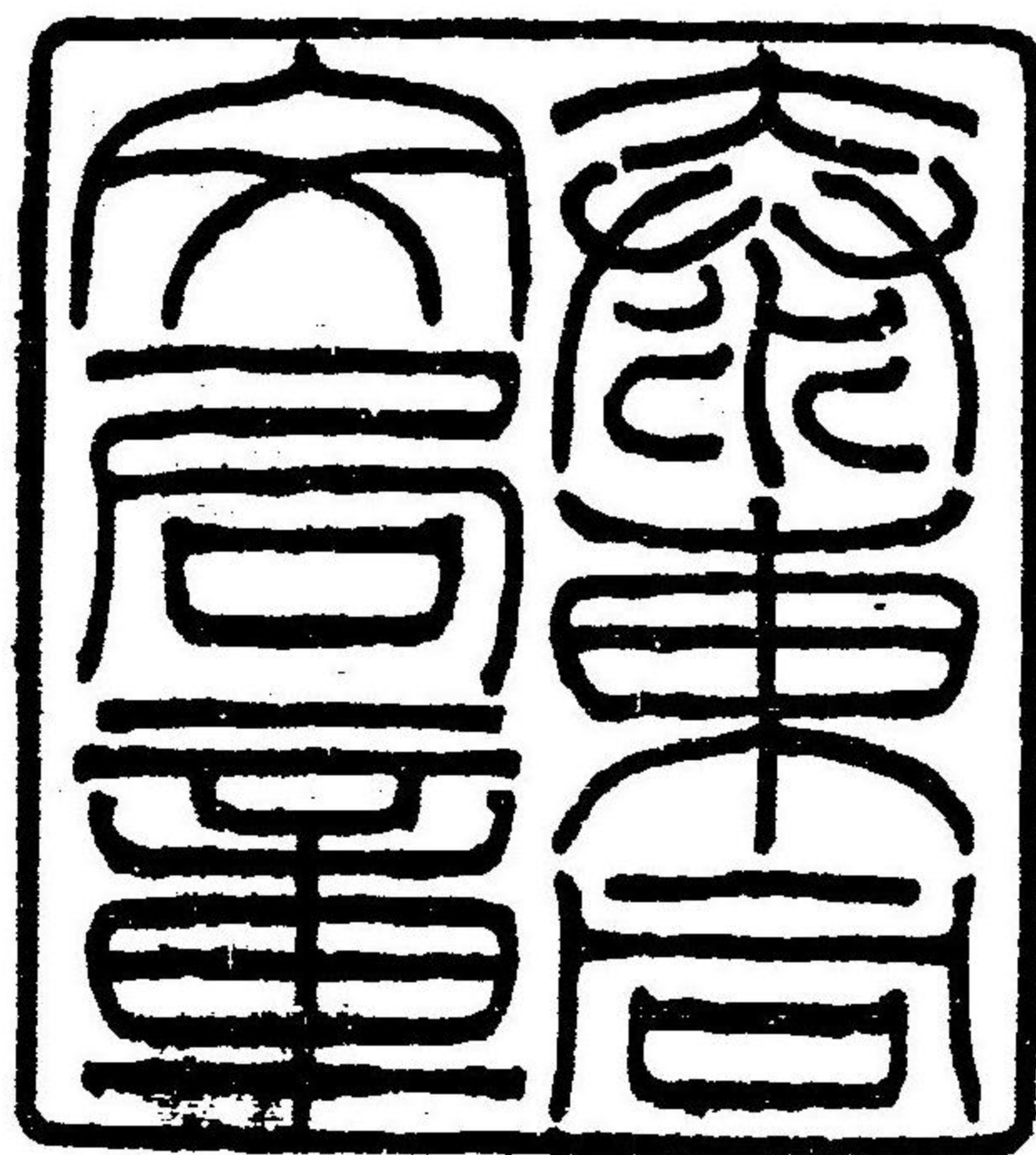
一 日東之與中華、固為唇齒輔車之國矣、觀字內之形勢、兩國宜相親相結、蓋莫急於今日也、而欲其相親相結、則莫先於意志之相通。意志之相通、則必藉語言為之媒介。此吾所以有是書之著也。

一 此書之成也、有如臨渴掘井見獸作矢、故無暇顧事之漏脫與冗沓、加之、作者淺陋、不嫻華文、敘述不能達其意者頗多。有如舉例、從座右所獲而用之、草率之間、取舍不得宜、不免駁糝蕪雜之毀者不少。欲待後日再刊之時、芟削補修、以有所贖也。讀者幸諒焉。

一 古來、為華人說讀東文之法者、蓋以此書為首。故書中所用之品目稱謂、不典者居多。實出於不得已、讀者勿以杜撰見尤幸甚。

明治三十五年七月
光緒二十八年六月
刊行

書不存
經案許印



一本書、主讀法而非說文法者。故自文法視之、則有闕漏、有她足、識者幸諒焉。

著者誌

東文易解前編

目次

- 第一 文解
- 第二 字母
- 第三 靜動不貫句
- 第四 靜繫靜不貫句
- 第五 施受動相貫句
- 第六 施受動不貫句
- 第七 一施兩受致動句
- 第八 靜以靜致動句
- 第九 靜同靜致動句

一 一 五 六 七 九 十 十三 十四

第十	靜因靜致動句	十六
第十一	靜由靜致動句	十七
第十二	靜受靜致動句	十八
第十三	靜使靜致動句	二十一
第十四	時異句	二十二
第十五	動致動句	二十三
第十六	代靜句	二十五
第十七	繫靜句	二十七
第十八	輔動句	二十七
第十九	斷定句	三十三
第二十	疑問句	四十七

第二十一	希望句	四十九
第二十二	感歎句	五十一
第二十三	兩文語辭比較圖說	

東文易解前編

泰東同文局協修

文部省 國語調查會 補助委員 大矢透 著
東京外國語學校教師 金國璞 同校
東京高等商業學校教師 張廷彥

第一節 文解

東文之與華文異者、有三。曰字母、曰語尾變化、曰辭句之次序、惟此三者、為華人所難解也。然古時、東文多用華字華語、且構文之法、亦率皆類華之古文、故華人欲知東文者、先須畧通此三者、而後按古文字句次序、上下轉倒、以尋其意、猶東人讀華文之法、則東文亦不甚為難解也。但此三者中、如識字母、固不甚費力、而語尾變化與辭句之次序、則稍屬複

雜而非片時所能辨。故先宜平心靜氣、將字母習熟、而後逐本書編述之次第、徐々進步可也。

第二 字母

日東之字母、其數四十有八、以發固有之音、而或加之符號、或數母結合、則天下之聲音、無不畢具。錯綜聯綴之、則千言萬語、皆在是矣。

字母有真草二體、原皆取於華字。一者取真字偏旁、一者用極畧草字、而各假原字之首音、以定一音一聲也。

字母之排序、有二、曰以呂波歌、曰五十音、以呂波歌者、爲使兒童易於記誦、五十音者、或爲呼法之規矩、或爲語尾變化之準繩。併揭於此、欲學東文東語者、須先反覆記誦焉。

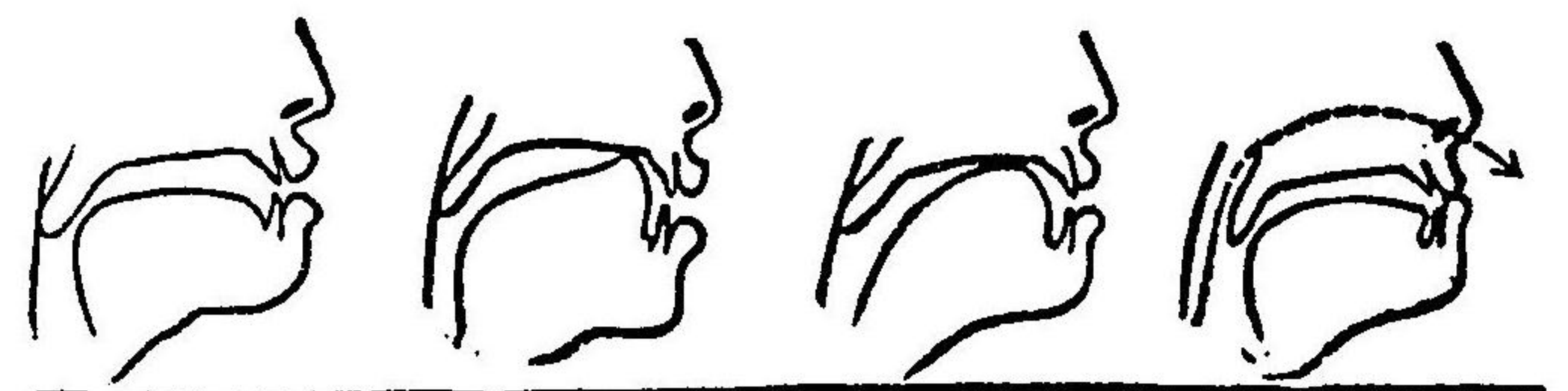
五十音圖

日東與中華、其聲音固不相同。故傳之、非面授口訣、究不能盡其妙。故今、畫各字母發音時之口形於圖上、與圖側、以標準之、故學者宜參驗圖中所記之呼法、而反覆呼之、當有所神會焉。日東之字母、原取原於華字、因其創造在千歲之上。故、當時所取之音、與今之音、迥然不同。故不足以示呼法。然、於字形之記憶、不無小補、故註於各字母之下。

ア	行	
ア	阿	
イ	伊	
ウ	宇	
エ	江	
オ	於	

口舌如圖側
形而平直發
喉音短呼之

ア韻
イ韻
ウ韻
エ韻
オ韻



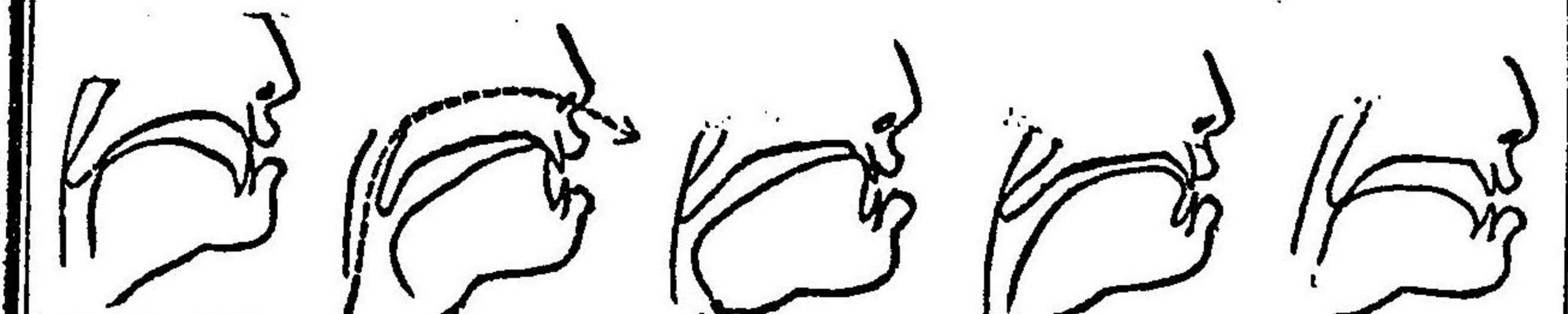
ワ行	ラ行	ヤ行	マ行
ワ 和	ラ 良	ヤ 也	マ 末
井 井	リ 利	イ 伊	ミ 三
ウ 宇	ル 流	ユ 勇	ム 牟
エ 慧	レ 礼	エ 江	メ 女
ヲ 乎	ロ 呂	ヨ 與	モ 毛

先如上唇開口與
兩唇一圖如微
開兩唇一圖如微
發音與口與
形如發音與口與

先如上唇開口與
舌尖上圖與
加側聲次與
形如發音與口與

先如上唇開口與
舌上圖與
接側聲次與
形如發音與口與

先如上唇開口與
兩唇一圖如微
發音與口與
形如發音與口與



ハ行	ナ行	タ行	サ行	カ行
ハ 半	ナ 奈	タ 多	サ 散	カ 加
ヒ 比	ニ 仁	チ 知	シ 之	キ 幾
フ 不	ヌ 奴	ツ 川	ス 須	ク 久
ヘ 邊	ネ 禰	テ 天	セ 世	ケ 氣
ホ 保	ノ 乃	ト 止	ソ 曾	コ 己

先如上唇開口與
舌尖上圖與
加側聲次與
形如發音與口與

先如上唇開口與
舌上圖與
接側聲次與
形如發音與口與

先如上唇開口與
兩唇一圖如微
發音與口與
形如發音與口與

先如上唇開口與
舌尖上圖與
加側聲次與
形如發音與口與

先如上唇開口與
舌上圖與
接側聲次與
形如發音與口與

附號字母

ダ行	ザ行	ガ行
ダ	ザ	ガ
ヂ	ジ	ギ
ヅ	ズ	グ
デ	ゼ	ゲ
ド	ゾ	ゴ

長時即各音増為二
長時即各音増為二
長時即各音増為二
長時即各音増為二
長時即各音増為二

與振動喉內聲帶共發カナ各行音

鼻音字母

バ行	バ行
バ	バ
ピ	ビ
ブ	ブ
ヘ	ベ
ホ	ボ

先合兩唇固鎖音道次與振動喉內聲帶共發ア行音

ン

挺舌頭密接上齦如發ナ行音之時而出音於鼻

以呂波歌圖

東文之用字母也、或用真體、或用草體、時或併用真草兩體、其用法皆

相同。但晚近所著之書、多用草體、故學者宜與真體共熟記之也。
此圖呼法、右側註以真體、左側註以原字、學者參看以供記誦之便可也。

良 <small>ラ</small>	与 <small>ヨ</small>	知 <small>チ</small>	以 <small>イ</small>
ら	よ	ち	い
武 <small>ム</small>	太 <small>タ</small>	利 <small>リ</small>	以 <small>イ</small>
む	た	り	ろ
字 <small>ウ</small>	礼 <small>レ</small>	奴 <small>ヌ</small>	呂 <small>ロ</small>
ら	れ	ぬ	は
為 <small>井</small>	そ	互 <small>ル</small>	波 <small>ハ</small>
の	そ	を	に
乃 <small>ノ</small>	曾 <small>ツ</small>	を	仁 <small>ニ</small>
お	つ	を	ほ
於 <small>才</small>	川 <small>ツ</small>	和 <small>ワ</small>	保 <small>ホ</small>
久 <small>ク</small>	ね	か	へ
	奈 <small>ナ</small>	加 <small>カ</small>	と
			止 <small>ト</small>

无 <small>ン</small>	安 <small>ア</small>	也 <small>ヤ</small>
ん	あ	や
	左 <small>サ</small>	也 <small>ヤ</small>
	き	ま
比 <small>ヒ</small>	幾 <small>キ</small>	未 <small>マ</small>
ひ	由 <small>ユ</small>	け
毛 <small>モ</small>	女 <small>メ</small>	計 <small>ケ</small>
も	み	ふ
毛 <small>モ</small>	美 <small>ミ</small>	不 <small>フ</small>
せ	し	ふ
世 <small>セ</small>	之 <small>シ</small>	己 <small>己</small>
す		こ
寸 <small>ス</small>		え
		不 <small>フ</small>
		て
		天 <small>テ</small>

第三 靜動不貫句

凡人與物之所作、有不藉他事他物、而獨自動者、謂之不貫句、即如圖中

狗之所作是也。所畫之式、今稱不貫句、其叙法最簡、且東華兩文不甚差異、故先舉之于此、以為東文讀法入門。



イヌハシル
狗走る。 誦法

此東文之所異於華文、惟有動字下附る字母而已。故按字義讀之、則文意已可解、然東文於此る字、猶有緊要之意、讀者須留意焉。抑東語之動字、一語中有變類不變類、變類謂之語尾、不變類謂之語

幹、語幹者、表語之本義、語尾者、常隨用處而變其形、以表所作之時、與文意之斷續等。語尾變化之處、在東文為甚緊要之類、故當用華字也、必以字母附于其語尾、為例、故此文動字下有る字也。

凡動字語、以五十音中ウ韻字母為語尾者、皆表其語之為當時目前之所作與為文意之盡頭也。る者、屬ウ韻、故應知此文為目睹圖如中事件、而直叙之者、以顯狗在目前走之意。

讀者、若由以上所說、而既能領會例文、則以下所舉之東文、不待指授而一讀之、即可得其解焉。

讀習文

人立つ。 我歩く。 彼來る。 彼往く。
男怒る。 女笑ふ。 僕病む。 疾癒ゆ。

夜、明く。 日、暮る。 雨、降る。 風、吹く。
老人、悲む。 少年、喜ぶ。 小兒、啼く。
軍隊、進行す。 敵兵、退却す。 知識、開く。
學術、進む。

第四 靜繫靜不貫句

茲有與靜動不貫句相似者、而專寫人與物之形狀態度。今稱之靜繫靜不貫句、其文尾、因語言之變異、有數種、舉隅於左。

水、清し。

月、明かなり。

賦性、快活なり。

衆論、囂々たり。

此式、東文之與華文異者、在文尾有しなりたり等之字母。然皆爲前章所謂語尾變化附之耳。如其文意、悉寓華字中、故學者、若急於解文意、則直可以此等字母看做一種虛辭、直讀過華字可也。然苟欲精求東文者、亦不可附之忽畧。故今摘出繫靜字數種、而示其概要、學者宜留意焉。

第一種 強し。弱し。堅し。高し。遠し。黒し。

赤し。甘し。苦し。

第二種 軟かなり。 鮮かなり。 速かなり。

緩かなり。 健かなり。等

以上二種、用國訓者。

第三種 判然たり。 欣然たり。 灼然たり。

確乎たり。 嶷乎たり。 斷々乎たり。

怡々たり。 洋々たり。 綽々たり。等

第四種 美麗なり。 愉快なり。 清潔なり。等

以上二種、以華音而讀之者。

第五 施受動相貫句

前章、論靜不貫句、今又有施受動相貫句、即與前文不同、必藉他事他物

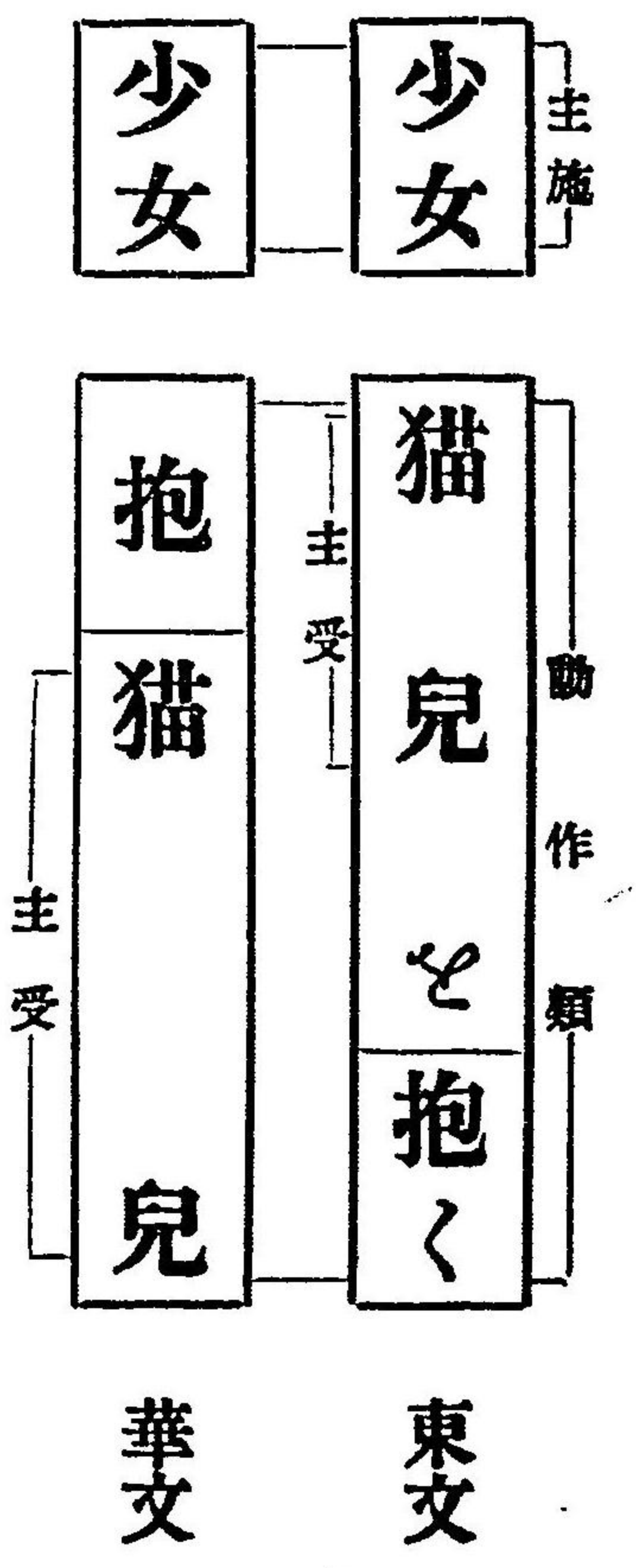
而爲之貫動、如圖中少女之所作是也。此文亦假稱貫動句、舉隅如左。



シヨージ・ビョーシ イダ
少女猫兒を抱く。

凡人物與其動作相合而成事、其事之所起者、謂之主施。其事之所落者、謂之主受。如文中所言少女、爲主施。猫兒を抱く、爲動作類。猫兒爲主受。

試於相貫句叙法、嘗對照兩文、則動類中見主受與動字之次序相轉倒、是兩文之所大異最宜注目。



自華文、視東文、則主施與動字之位置全反如此。故華人欲讀此等東文其容易解法、則莫如以主受字下之字、做上下反讀之符號、反轉讀之如左。

少女猫兒ヲ抱ク

レ反讀符也

讀習句

字と書く。	書と讀む。	文と作る。
月と観る。	花と賞す。	杯と把る。
水と汲む。	飯と炊く。	湯と沸す。
農夫、鋤と把る。	樵夫、木と斫る。	
漁父、魚と漁る。	匠人、器と造る。	
商人、物品と商ふ。	官吏、事と執る。	
教師、子弟と教ふ。	子弟、學術と修む。	
議官、政務と議す。	學士、學理と論す。	

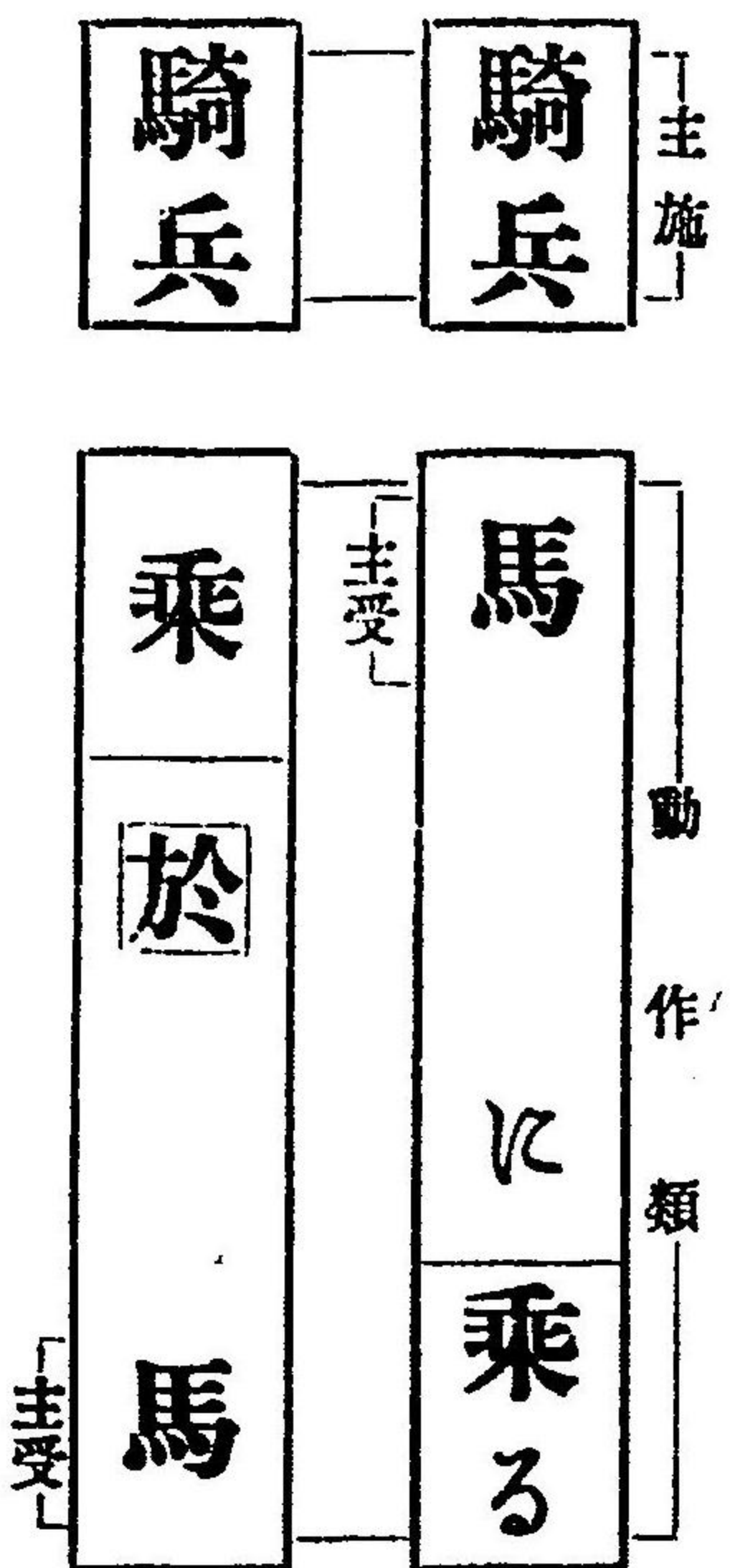
第六 施受動不貫句

人與物之所作中、有行於他人他物者、如圖中騎兵之所作是也。此叙法、以華文常多置於于等助辭於他人他物、今稱之不貫動句、其例如左。



キヘイウマ
騎兵馬に乗る。

如圖中事件、在華文、常用在字於字等助語辭於主受字上、即曉焉。而在東文必用以字於主受字下、爲例、而動類中、主受與動字之位置相反轉、與前詳貫動句同然、其以字與於在等字其義相同、故文意亦甚易解。今對比兩文之異同、如左。



反讀法

騎兵馬ニ乗ル

讀習句

卓に凭る。 倚子に坐す。 杖に仗る。

船に乗る。車に上る。轎に駕る。
 山に登る。海に入る。谷に下る。
 月に吟す。花に酔ふ。雪に烹る。
 魚淵に躍る。鳥空に翔る。
 獸山野に走る。蟲叢間に鳴く。
 樵夫林に入る。學生學校に登る。

第七 一施兩受致動句

凡於文中有兩個主受字者、若叙其事、或以甲主受先之、或以乙主受先之、自爲甲乙二式、今先舉甲式之例。



美人ビジン瓶ビンに花ハナを挿ササす。

是先瓶於花也。今對比兩文而示異同如左。

美人	美人	主施
瓶に花を挿す	瓶に花を挿す	動作類
花於瓶	花於瓶	「甲主受」「乙主受」

反讀法

美人瓶ニ花ヲ挿ス

讀習句

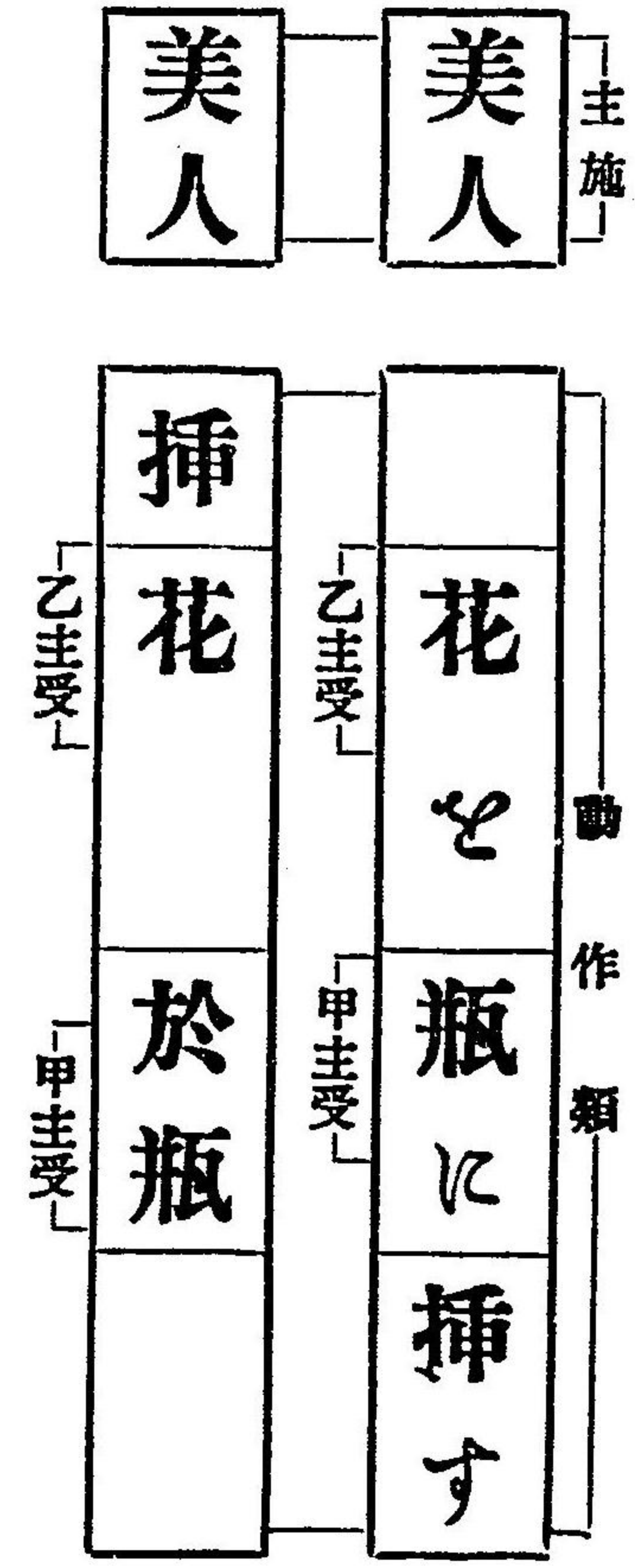
泉に口と嗽ぐ。 流に足と濯ふ。
 船に貨物と載す。 車に米と積む。
 囊中に貨幣と納む。 卓上に書冊と置く。
 家婢、主公に茶と羞む。
 園丁、花木に水と澆ぐ。
 臣民、國家に身命と致す。

子女、父母に孝養と盡す。

乙式文例

美人、花と瓶に挿す。

是先花於瓶也。兩文之異同左如。



反讀法

此式之讀法、比前者稍覺複雜、故別以數字爲符號、學者宜讀自
一韻至于二、再韻至于三則其意可會。

美人花ヲ瓶ニ挿ス

讀習句

富者、衣食と窮民に施す。
識者、憂患と未發に察す。
政府、良政と天下に行ふ。
國民、賦税と政府に納む。
良藥、口に苦く、忠言、耳に逆ふ。

世界と、方外に擲ち、須彌と芥子に納む。

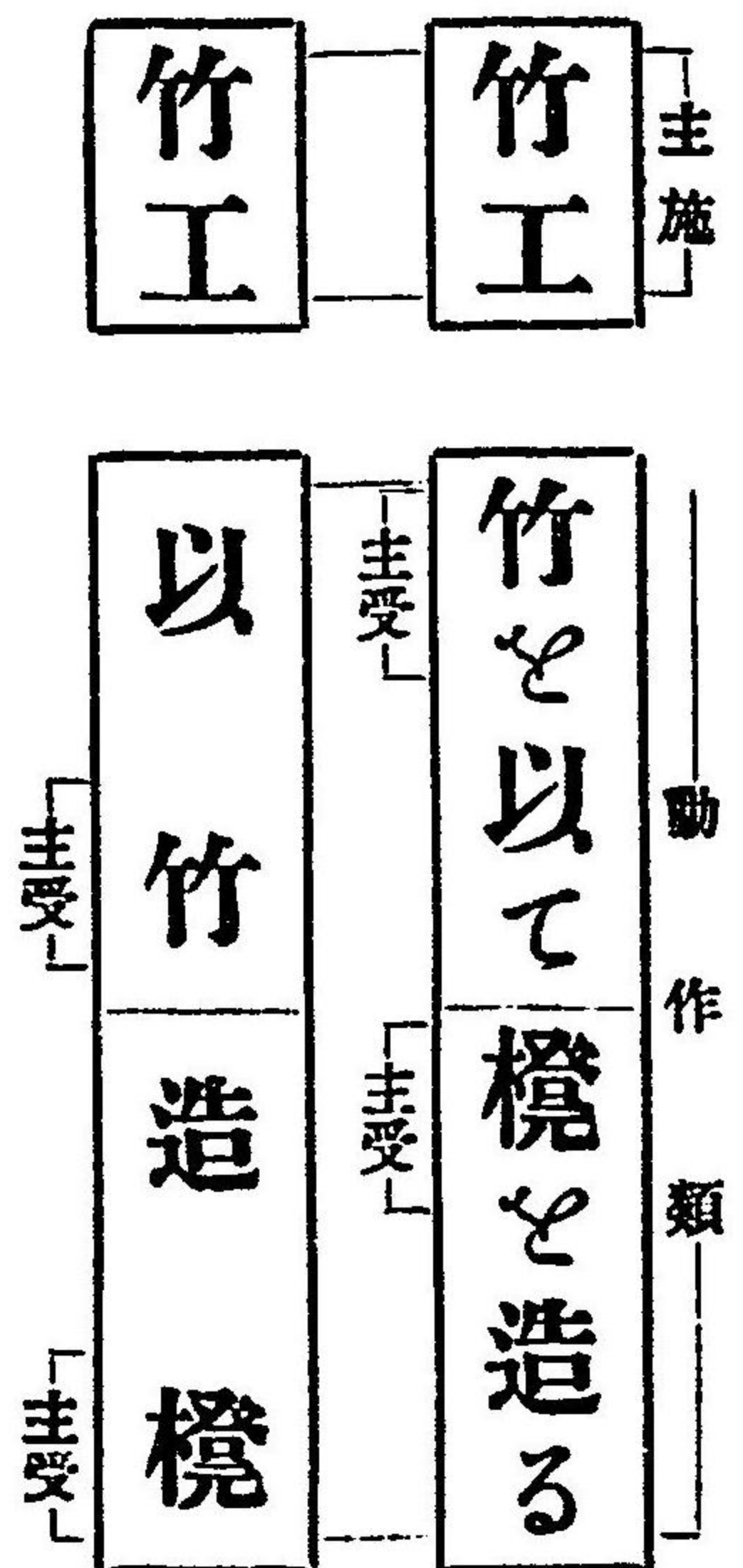
第八 靜以靜致動句

凡所作中、有必要器具材用者、如圖中竹工之所作是也。此文、謂靜以靜
致動句、其如例左。



チク コー タケ モリ コシカケ ツク
竹工、竹を以て櫂を造る。

此式、兩文之比較、左如。



反讀法

竹工竹ヲ以テ橈ヲ造ル

讀習句

竹と以て、籃と作る。木と以て、匣と造る。

紙と以て、花と作る。土と以て、土偶と作る。

鍛工、鋼と以て、刀を製す。

陶工、泥と以て、皿を造る。

農夫、鋤と以て、田を耕す。

匠人、鑿と以て、孔を穿つ。

獵夫、銃と以て、獸を射る。

東文、時有不用を以て、而代之以にて、如左句。

竹にて、橈と作る。鋼にて、刀を鍛ふ。

繭にて、絹を織る。楮皮にて、紙を漉く。

電氣にて音信を通ず。汽力にて機關を轉ず。
鐵路にて貨物を運ぶ。汽船にて大洋を航す。
管にて天を窺ひ、錐にて地を刺す。
玉にて鳥を撃ち、香にて飯を爨く。
人、三寸の舌にて、五尺の身を破る。

第九 靜同靜致動句

所作中、有兩靜共者、如圖中老爺少女之所作是也。華文、常用與字、故稱靜同靜句、但因主受位置之異、爲甲乙二式、先示甲例如左。



ロージン ショージョ ツキ ミ
老人、少女と月を觀る。

此式、係老人爲主施而少女在主受者。こ者、與華文之與字同義、今對比兩文、則有異同如左。

老人	主施	老人	動作類	少女と月を觀る	主受
老人		與少女觀		月	主受

反讀法

老人、少女ト月ヲ觀ル

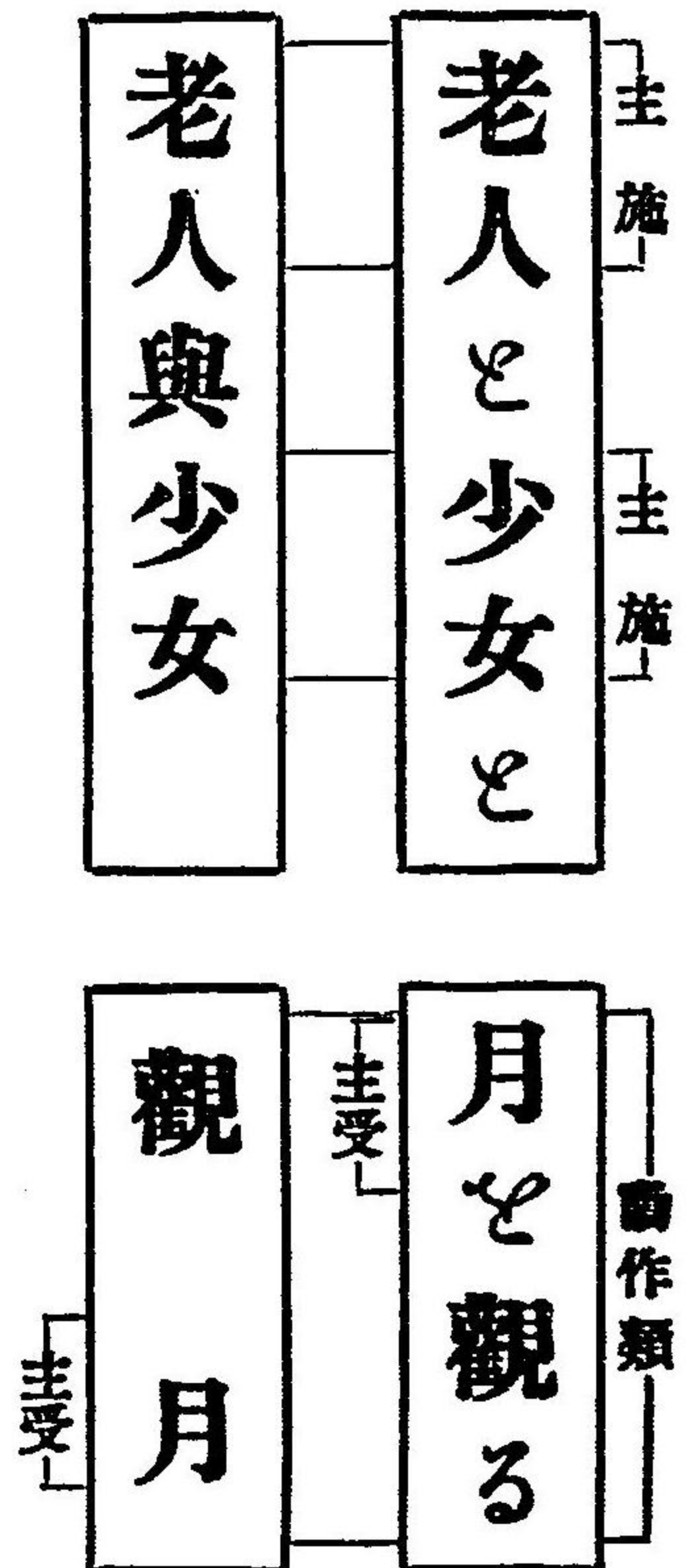
讀習句

兒童、狗ト戯る。 某、弟ト學校ニ登る。
 彼、父ト歩く。 我軍、敵兵ト衝突す。
 君子、小人ト道ト異にす。
 賢王、民ト樂ト同くす。
 堯舜、人ト同じ。 實、華ト違ふ。

乙式文例

老人ト少女ト月ヲ觀る

此式、係老人少女共爲主施者也。東文、主施下之二「ト」字合之、與華之
 與字同義、對比兩文而示其異同。



反讀法

老人ト少女ト月ヲ觀ル

讀習句

天と氷と、接す。月と鼈と、相異なり。
 虎と猫と、形相似たり。
 君子と、小人と、其行殊なり。
 忠と孝と、其理同じ。
 上下と天地と、同流なり。

第十 靜因靜致動句

人之所作、有關於他之利害者、如華文之爲君市義是也。今稱之靜因靜致動句、其文例如左。

臣民君國シミンクンコクのたために身命シンメイと忘ワスる

於此文、ために者、與華文之爲字同義也。今比較兩文異同、則如左。

臣民	君國のたために	身命と忘る
----	---------	-------

臣民	爲	君國忘	身命
----	---	-----	----

反讀法

臣民君國シミンクンコクノ爲ニ身命ヲ忘ル

讀習句

公益のたために、財と散す。

酒色のために、身と過る。
講學のために、日東に遊ぶ。
怠惰のために、家産を蕩盡す。
心眼、誤謬のために闇し。
蘇秦、趙のために合従す。
張儀、秦のために連横す。

第十一 靜由靜致動句

人與物之所作中、有從他事物出來、若取來者、如華文之「人從日邊來」
鐵自山出等是也。今稱此叙法、謂靜由靜致動句、其例如左。

大使タイシ日東ニッポンよりヨリ至イタる

東文より者、大率與華之從自同義。然より者、又與華之「承恩於君」
弗獲於上等之於字之義通用。其他猶用法之與華文不同者不少。皆
應推從自之義而解焉。此式兩文之對照如左。

大使	日東	より	至る
----	----	----	----

大使	自	日東	至
----	---	----	---

反讀法

大使、日東ヨリ至ル

讀習句

珠玉、琨岡より出づ。大象、印度より來る。
 漆液、漆樹より生ず。理學、宋儒より起る。
 佛教、漢時より行はる。
 功臣、朝廷より爵位を賜はる。
 政府、人民より賦税を徵收す。
 九層の臺は、累土より起り、千里の行は、足下より始まる。

第十二 靜受靜致動句

人與物之作動中、有非由自己之意而作動、受他之作動而作動者。如圖中稚兒之所作是也。此等叙法、於華文者、常用被所見等之字、故今稱靜受靜致動句、其例如左。



稚兒チシハ母ハに抱イダかる。

此式、母者主動之靜而、稚兒者受動之靜、稚兒爲主施而母爲屬體也。今對比兩文之異同如左。

稚兒

母に抱かる

稚兒

被抱於母

東文作用言、抱かる者、其常形抱く之變語尾而成受靜致動形也。即る字母者、與華之被見所等之同義也。

凡作用言、如此變語尾而成受靜致動形也。各因其種類按左列二則中之一者也。

甲則、變語尾之ウ韻字母、爲ア韻字母、而後添る者。即如下圖第一類。

乙則、變語尾之ウ韻字母、爲エ韻字母、而後加らる者。即如下圖第一二類。

類一第	常形	受靜致動形
抱	く	か
造	る	ら
汲	む	ま
		る

母音ウ

母音エ

變語尾

第	常形	受靜致動形
忘	る	れ
捕	ふ	へ
		ら
		る

類製す製せらる

等物語

等物語

等物語

反讀法

稚兒母ニ抱カル

讀習句

官兵賊に襲はる。

貓兒狗に追はる。

盜兒警官に捕へらる。

囚徒法官に糾治せらる。

人民政府より賦税を徴收せらる。
法に循ひ正を守る者世に侮らる。

第十三 靜使靜致動句

人與物之作動、有靜使靜而爲事者。如圖中少女之所作是也。其叙法、謂之靜使靜致動句、其隅如左。



シイジョナ
少女稚兒として、
クダモノ
果を採らしむ。

此文中、作用言採らしむ者、其常形採る之變其語尾而成使靜致動形也。而其しむ、與上之をして一合、而當華之使令教俾等之義。凡以作用言、如此變語尾而爲靜使靜致動形也。其法、以しむ、代受靜致動形之るらる而已。

		受靜致動形
第	種 一	抱か る
第	種 二	抱か しむ
第	種 一	造ら る
第	種 二	造ら しむ
第	種 一	汲ま る
第	種 二	汲ま しむ
第	種 一	忘れ らる
第	種 二	忘れ しむ

種 二	捕へらる	捕へしむ
種 一	製せらる	製せしむ

於此式、兩文之異同如左。

少女	稚兒として	果を採らしむ
----	-------	--------

少女	使稚兒	採果
----	-----	----

反讀法

少女稚兒(使)ヲシテ果ヲ採ラシム

讀習句

僮僕(使)として、花に浣あがしむ。
 婢妾として、鸚鵡を飼はしむ。
 經練、愚として、能く智ならしむ。
 偶然利達(使)の事、愚者をして、智に似せしむ。
 善政、人民として、其生に安ぜしむ。
 惡政、老稚として、溝壑に轉ぜしむ。
 齊、萊人として、兵を以て、定公を劫かさしむ。
 鄭人、子濯孺子として、衛を侵さしむ。

庚之斯として、之を追はしむ。

第十四 時異句

凡動作、皆有未成、將成、已成、既成、來時、當時、過時、昔時。此法、兩文共具矣。但、東文者、多以語尾之變化、示之。華文者、加助語於作用字上而表之。今稱之謂時異、併舉兩文於左而見其異同。



將	將
斫	斫
樹	樹
	んとす

未 來
成 時



今	今
斫	樹
	と
樹	斫
	る

將 當
成 時

既	既
斫	樹
	と
樹	斫
矣	り
	れ
	たり
	り

已 過
成 時

曾	曾
斫	樹
樹	と
	斫
矣	り
	たり
	き

既 昔
成 時

東文作用語尾之變而所表時異之法、按語言之種類而分數種、且各有定則、軼然不可紊。今、詳述於此、仍恐有錯沓難解之憂。惟須看既將今曾等之字、若文尾有んこすたりれりせりたりき等之字母、即可推知其大意也。

讀習句

人、立てり。 彼、往く。 僕、病めり。
 病、癒えんとす。 學術、進歩したり。
 彼、曾て、修學の爲に、泰西に遊びたりき。
 今、既に、還れり。 將に、大に用ひられん(被)とす。
 彼國、既に、大に富めり。 方に、今盛に、強兵と勉

む。他日、必ず將に、宇内に雄飛せんとす。
桓山の鳥、四子を生めり。羽翼既に成れり。將
に四海に分れんとす。

第十五 動致動之句

人與物之作動、有如以上諸式皆單行者、又有二三同時、若相連繼而起
者。其叙法、今稱之動致動句、由作動連續之情勢而有數種、今對照兩文
而隅舉於左。

走	走
過	過

提	提
來	來

且	且
步	步
且	且
語	語

採	採
薪	薪
汲	汲
水	水

採	採
薪	薪
汲	汲
水	水

爲	善事	而	得	善報
爲	善事	而	得	善報

勵	精	圖	治	而	富	國	強	兵
勵	精	圖	治	而	富	國	強	兵

富	國	強	兵	而	後	舉	事	於	外
富	國	強	兵	而	後	舉	事	於	外

既熟讀以上諸隅、比較兩文之辭句、而知以下之東語與華字其意相

同、則動致動句之句、并文隨見而可解。但東文句々連接之處、其句末皆變ノ韻若エ韻之音、學者須注意。

つゝ	且	且	且
また	又	あるは	或
若くは	若	或は	或
て	而	而して	而後
而して	而		

第十六 代靜句

代靜字者、謂代一文中重出之名稱而簡其指呼者也。而其中有代人名者、有通人及事物而代其指呼者、今舉東文常用者於左。其中有以華字

而記者、與以字母而記者。以華字而記者。雖直隨其字義而可解。至以字母而記者。學者宜熟記焉。

人代靜句

われ

余、予、吾、我

用法、如華之「以吾余今予當」等。

わが

吾、我、

用法、如華之「吾國我家」等。

余が予が

己己、自、

用法、與華同。

をのれ

なんぢ

汝、爾

用法、與華同。

かれ

彼

用法、如華之「彼曰彼曾」等。

たれ

誰

用法、與華同。

あるひと

或

用法、同上。

われら

吾等、吾曹

用法、同上。

通代靜句

これ

是、此、之

用法、如華之「是也」以之等。

この

此、斯

用法、如華之「斯道此人」等。

それ

其

用法、如華之「君其思之」等。

それ

夫

用法、與華同。

その

其

用法、如華之「其人其家」等。

かれ

彼

用法、如華之「彼與是從彼」等。

用法、如華之彼山彼樹等。

用法、與華同。

用法、同上。

用法、同上。

用法、同上。

用法、同上。

用法、同上。

彼

夫

于茲

孰

何

是等

彼等

かの

かの

こゝに

いづれ

なに

これら

かれら

第十七 繫辭句

凡人及事物之名稱者、除特稱一人一事一物之外、皆為一名而通一群一類者、故非添加他辭句而表別之、則不能明確其義、今稱其所添加之

辭句、謂繫辭字。繫辭言者、別辭字之屬與形勢也。種隔舉於左。

甲式 以所有者、所屬者、所在地等之名稱者、皆屬之。

林氏の園地

林氏之園地

製艦の材料

製艦之材料

東洋の富士峯

東洋之富士峯

汝の家産

汝之家産

汽車の鐵軌

汽車之鐵軌

中國の廣河

中國之廣河

乙式 以人及事物之作用者、皆屬之。

清き水

高き山

明かなる月

快活なる賦性

確乎たる議論

綽々たる態度

走る尙

退却する兵

抱く猫兒之少女

月を觀る人

窮民を濟ふ富者

賦稅を納む國民

母に抱かる稚兒

被母抱る稚兒

使して稚兒採果を之少女

清き水

高き山

明かなる月

快活なる賦性

確乎たる議論

綽々たる態度

走る狗

退却する兵

猫兒を抱く少女

月を觀る人

窮民を濟ふ富者

賦稅を納むる國民

母に抱かる稚兒

被母抱る稚兒

使をして果を採らしむる少女

將	將	將	將
に	に	に	に
樹	樹	樹	樹
を	を	を	を
斫	斫	斫	斫
ら	ら	ら	ら
ん	ん	ん	ん
と	と	と	と
す	す	す	す
る	る	る	る
人	人	人	人

學者、熟視以上之諸例、應知以上諸文、爲繫靜句而連接名稱、則必皆其作用語尾、即如第四繫靜句中第一種者、シ變キ、其第二種第三種者、リ變ル、於第十四時異句之昔時者、キ變シ、其他者率皆、着地、若

別添ル而連接于名稱、且特要留意者。凡繫靜句之語尾、以んとする而成者、爲來時未成之意、以たりし而成者爲昔時既成之意。

第十八 輔助句

作用言之意義、亦如名稱、甚廣濶。故非以他辭句、修補裝添之、則不能盡其文意。今稱其辭句謂輔助句、而從其助動之旨分爲數類。

甲類 屬之者、皆辭句簡單而且其意義與次序、兩文共畧相同、故由語尾之有無同異、而分其類、每類各舉其四以爲之隅。

- 凡。猶。甚。唯。等
- 大凡。大抵。大率。一旦。等
- 以上、無語尾者。

遠く。	高く。	早く。	強く。
恰も。	苟も。	最も。	尤も。
即ち。	忽ち。	強ち。	倏ち。
誠に。	正に。	大に。	更に。
益々。	増々。	愈々。	各々。
希くは。	翼くは。	惜らくは。	願くは。
動すれば。	例へば。	譬へば。	惟みれば。
若し。	儻し。	如し。	但し。
悪ぞ。	何ぞ。	如何して。	等

以上、有語尾者。

もし	たとひ	つひに	とも
<small>若。</small>	<small>例、命。</small>	<small>遂。</small>	<small>共、俱。</small>
すべて	また	一たび	あるは
<small>都、總。</small>	<small>又。</small>	<small>一。</small>	<small>或。</small>

以上、常多以字母記者。

乙類 屬之者、皆係熟字連字等。

莞爾として。	欣然として。
忽焉として。	煥乎として。
怡々として。	齷齪として。
寂寞として。	自然に。
激烈に。	漸次に。
	同時に。

丙類 以時期、狀別者屬之。

これより先
先 是

今より後
自 今後

爾りしより以來
自 爾 以來

ここに於て
於 是

この時に當て
當 此時

進行する時に
進行之時

退却の際に於て
於 退却之際而

危難の間に在りて
在 危難之間而

衰頹の極に達する今日に及んで
及 達 衰頹極之今日 而

國勢回復の機運に臨んで
臨 國勢回復之機運而

丁類 以作用之原因由縁、狀別者皆屬之。

これに由て
由之

これと以て
以是

さるは
然者

されば
然則

兒孫の爲めに
爲兒孫
遠く慮る
遠慮

兒孫を慮るが爲めに心を盡す

爲慮兒孫

盡心

古の道に由て
今の俗を變ず

由古之道
變今之俗

小學の成功に因て
大學の明法を著す

因小學之成功
著大學之明法

上下相親むがゆゑに
政令能く行はる

上下相親之故政令能行

第十九 斷定句

凡人對一人、則察其賢愚、分其妍醜、視其行止。見一物、則明其精麤、辨其好惡、尋其出處來源。遇一事、則原其起因、推其成否、究其利害與得失。或以可定之、或以否定之、或以推斷之者。是為常矣、而叙之以文也、雖從其事情而種々異其樣式、今概稱之謂斷定句。但欲盡舉之則頗不堪其煩、故今唯摘出常以字母所記之語辭者也。學者宜做以上之例、而比較兩文、以領會東文辭句、且記得以字母所記之東語。

仁は

人の安宅なり

仁者

人之安宅也

仁は、者也。指別事物之辭、華文多省之。然東文不省為常。なり、也也。斷定事物之辭。

規矩者

方圓の至れるものなり
方圓之至者也

もの、者也。汎稱事物之辭。

富と貴とは
富與貴者

人の欲するところなり
人之所欲也

黑夜行ふところの事	必青天白日の下に顯はる
黑夜所 行 之事	必顯於 青天白日之下

こころ所也。汎稱事物之情景之辭。

孝とは	善く父母に事ふる	ことなり
孝云者	善 事	父母 也

こは、云者。華文多省云字。

こ、事也。華文不用之。東文常置之於一事物作用之占主施若主受之位置者之末尾、以示其作用言之變成名稱狀者也。

衆は	衆人をいふ	仁は	仁者をいふ
衆者	謂 衆人	仁者	謂 仁者

博く愛する	之を仁といひ行ひて之を宜する
博 愛	之 謂 仁行 而 宜之

之を義といふ	之 謂 義
--------	-------

いふ、謂也。いひ者、其連續于下之形也。こ者、提示事物之辭也。

寡人の國に於けるや	寡人之於國也	心を盡すのみ	盡心焉耳矣
-----------	--------	--------	-------

亂臣割居して	四分五烈す	是	之を伐んのみ
亂臣割居而	四分五烈	是	伐之而已也

のみ耳而已也。

師は	道を傳へ	業を授くる	所以なり
師者	所以傳	道授業	也

天は	萬物に於て	最も	大なりとなす
天者	於萬物爲最	大	

禮の用は	和を	貴となし	先王の道は	之を
禮之用者	和爲貴	貴	先王之道者	之

善と爲す	爲善
------	----

なす爲也。なし者其連續于下之形也。

仁の器たること	重く	その道たること	遠し
---------	----	---------	----

仁之爲器

重

其爲道

遠

仁と義とは

定名たり

道と徳とは

虚位たり

仁與義者

爲定名

道與徳者

爲虚位

たり、爲也。たる者、其連續名稱之形也。

孔子

委吏となり

司職の吏となる

孔子

爲

委吏爲

司職吏

なる、爲也。なり、其連續于下之形也。

徳の轄ること

毛のことし

徳之轄

如毛

王言は

絲のことしその出ること

綸のことし

王言者

如絲

其出

如綸

いんごし、如也。いんごく者、其連續于下之形也。

山には

草木禽獸

あり

於山者

有

草木禽獸

山には、於山者也。

有	梁に嘯くもの	あり	從て	之を燭すに	見るこゝなし
有	嘯於梁者		從而	燭之	無
					見

有	聲と形と	ある	ものは	人獸	これ	なり
有	聲與形			人獸	是	也

無	聲と形と	なき	ものは	鬼神	これ	なり
無	聲與形			鬼神	是	也

鬼は 聲なく形なく氣なし

鬼者 無聲無形無氣

魑魅罔兩	能く逢ふこと	なし
魑魅罔兩	莫能逢	

あり、有也。ある者其繫靜也。
なし、無也。莫也。なき者、其繫靜而なく者其輔動也。

權綱	已に在りて	下に在るは
權綱	在已而在下者	

敢て之と干すことなし	莫敢干之
------------	------

にあり、在也。ある者、其繫靜也。

地方百里にして	地方百里
以て王たるべし	而可以爲王

至徳といふべきものなり	泰伯は
可謂至徳者也	泰伯者

宜しく以て南面して秦を制すべし	宜
以て南面して秦を制す	以
而制秦	而
	制
	秦

其當に去るべきところを去る	其
去其所當去	去

學者須らく千古の隻眼を具へて之と看るべし	學者
須らく千古の隻眼を具へて之と看る	須
具千古之隻眼而看之	具
	千
	古
	之
	隻
	眼
	而
	看
	之

べし、可也、宜也、須也、當也。べき者、其繫靜形也。而べく者、其繫動

不仁者者

不可以

久

處約

民は

これに由らしむべし

之に知らしむべからず

民者 可使由之

不可使知之

利器を以て小兒に托すべからず

不可以

利器

托

小兒

べからず不可也。

士は

以て

弘毅なら

ずんばあるべからず

士者

不可以

不弘毅

すんばあるべからず不可不也。

治を願ふの君

以て之を考ふる事なくんばあるべからず

願治之君

不可以莫考

之

なくんばあるべからず不可莫也。

天下の治

勞せず

して

致すべし

天下之治

可不

勞

而

致

彼	彼
奪其民之時	其民の時を奪ひて
而使不得耕耨	耕耨して以て
而以	

其父母を養ふ	ことを得	ざらしむ
養	其父母	事

ざらしむ、使不也。

上を犯すことを好まずして	亂を作す
不好犯	上事
而	好作亂

ことを好むもの未た之あらず	者未之有
事	

未だ...あらず、者未、有之意也。

之を其口 <small>(於)</small> に <small>た</small> 擧ぐるのみならず	而已也
不惟擧之於其口	

之を其書に筆す	而筆之於其書
して	

たゞのみならず者、不啻、不惟等之意也。

園を視れば	園丁を知る
視園	則知園丁

ば、則也。

人	既に	此世に生れたれば	たゞ	當に	此世の人となるべし
人	既生	此世	則但	當爲	此世之人

たれば者、既...則之意也。

孫叔敖	嬰兒なり	し時	出遊して	兩頭の蛇を見	
孫叔敖	爲	嬰兒之時	出遊	而見	兩頭蛇

しかば	殺して	之を埋め	たりき
則	殺	而埋	之

し者、示事之既然之辭。

しかば、以既然之事實而接下句之辭。

たりき、斷定既然作動之辭。

天下道	あるときは	見はれ	道なきときは	隠る	
天下有道	則	見	無道	則	隠

ときは、則也。東語原義於時者之意也。

終を慎み	遠さを追は	民の徳	厚さに歸せん
------	-------	-----	--------

慎終追遠則民之德歸厚

ば、則也。追は、者、若追則之意也。
ん、將也、歸せん者將歸之意也。

君子

君子 如欲化民成俗

欲せばそれ必學に由らん
欲則其必由學

聖人死せずんば大盜止まじ

聖人不死則大盜不止

ずんば者、若...則之意也。
じ者、可不之意也。

百畝の田 其時を奪ふことなくんば
百畝之田 勿奪其時 事 則

八口の家 以て飢ることなかるべし
八口之家 可以無飢事

なくんば者、若無...則之意也。
なかるべし者、可或有之意也。

滄浪之水	清ま	ば	以て	吾纓を濯ふ	べく
滄浪之水	清	則	可以	濯	吾纓

濁らば	以て	吾足を洗ふ	べし	
濁	則	可以	洗	吾足

以て	仕ふ	くべ	んば	仕へ	以て	止む	
可以	仕			則	仕	可以	止

べく	んば	止む
則	止	

べくんば者若可則之意。

眼能く	萬物を見れ	ども	自ら見る能はず		
眼能	見	萬物	而	不能	自見

吾曹	國恩を荷へり	力	微なりと	いへども		
吾曹	荷	國恩	雖	力	微	也

當に	其難に死す	べし
當	死	其難

こいへども、雖也。以當時之作用接反意之下句之辭。荷へり者、既荷之意也。

舊	舊より	吾帝の名を	聞さ	しかども	其實を	知らず
聞吾帝之名						
				而不知		其實

しかども、以過去之事實而接反意之下句之辭也。

吾	たどひ	生きて	人に	益なし	とも
吾	縦	生	而無益	於人	

吾	以て	死して	人に	害ある	べけんや
吾	可以	死	而有害	於人	

こも者假令雖之意。べけんや者何可之意。

借債	を生ぜんより <small>(與)</small>	は	寧晩食を喫せず
與生	借債		寧不如不喫晩食

して	睡に就くに	如かず
而	就睡	

仁は	人を愛するより <small>(乎)</small>	大なるは	なく
仁者	莫大乎	愛人	

心	動	か	さ	さ	る	に	道	あ	り	や
不	動	心					有	道	乎	

や、乎也、哉也。

仲	由	は		政	に	從	は	し	む	べ	き	か	
仲	由	者		可	使	從	政					也	歟

か、歟、乎也。

子	子	奚	ど	政	を	爲	さ	る
子	奚	不	爲	政				

奚ぞ……さる、一合疑問之辭也。

弟子	孰	れ	を	か	學	を	好	む	と	爲	す
弟子	孰	乎	爲	好	學						

孰れをか、以誰人乎之意。

其	前	に	譽	あ	る	と	其	後	に	毀	な	き	と
與	其	有	譽	於	前	孰	若	無	毀	於	其	後	

い	づ	れ	ぞ	や
い	づ	れ	ぞ	や

いづれぞや、孰乎也。

其奥に媚びん	より <small>(奥)</small> は	寧ろ	竈に媚び
與其媚於奥	則	寧	媚於竈

よとは	何の謂ぞや
云者	何謂也

よりは、與也。捨彼取是之辭。

よ、命令之辭。

ぞや、疑問之辭。

如何せば	これを養ふ	といふ	べけん
如何	則	可	謂斯養

べけん、疑可之辭。

如何せば、如之何則之意。

死者に比して	一たび	之に	酒がんに	は	
比	死者	而	一回	酒之	則

之を如何せば	可ならん	
如之何	則	可

酒がんに、將酒則之意。

可ならん、疑可之辭。

君子の言
君子之言

かくの如し
如此

豈
豈不

慥々たらざらんや
慥々乎

かくの如し、如此、若此也。

彼

悪

敢

當

我
哉

彼

悪んぞ

敢て

我に當らんや

我

第二十一 希望句

凡文、有不如前章諸式述其所思、對他而希望之、要求之者、其文是謂希望句、舉數隅於左。

願くは
願
子の志を聞かん
聞
子の志

聞かん、欲聞也。

願くは

善に伐る

こと

なく

願

無

伐善

無

施

施ること
勞
なからん

なからん、欲無也。

爾	尙	予一人	而	永	清	四	海
爾	尙	予一人	而	永	清	四	海
尙	予一人	而	永	清	四	海	
予一人	而	永	清	四	海		
而	永	清	四	海			
永	清	四	海				
清	四	海					
四	海						
海							

清めよ、須清也。よ者、命令之辭。

庶	幾	不	殞	其	美
庶	幾	不	殞	其	美
幾	不	殞	其	美	
不	殞	其	美		
殞	其	美			
其	美				
美					

幾からん、將近之意。

庶	幾	不	殞	其	美
庶	幾	不	殞	其	美
幾	不	殞	其	美	
不	殞	其	美		
殞	其	美			
其	美				
美					

殞さらん、將不殞之意。

無	友	不	如	己	者	友	と	す	る	な	か	れ
無	友	不	如	己	者	友	と	す	る	な	か	れ
己	不	如	己	者	友	と	す	る	な	か	れ	
不	如	己	者	友	と	す	る	な	か	れ		
如	己	者	友	と	す	る	な	か	れ			
己	者	友	と	す	る	な	か	れ				
者	友	と	す	る	な	か	れ					
友	と	す	る	な	か	れ						
と	す	る	な	か	れ							

過	則	勿	憚	改
過	則	勿	憚	改
則	勿	憚	改	
勿	憚	改		
憚	改			
改				

なかれ、勿莫無也、禁事之辭。

第二十二 感歎句

人、有對事物而或咏歎、或愛惜、或悲哀、或驚駭、謂之感歎句。舉數隅於左。

管	仲	の	器	小	な	る	か	な
管	仲	の	器	小	な	る	か	な
仲	の	器	小	な	る	か	な	
の	器	小	な	る	か	な		
器	小	な	る	か	な			
小	な	る	か	な				
な	る	か	な					
る	か	な						
か	な							

管仲之器小哉

かな哉也乎也。

美なるかな 水の洋々乎たる 丘が濟らざるは

美哉 水洋々乎 丘之不濟者

これ命なるかな

此命

大なるかな 死や君子も これに息し 小人も

大哉 死哉 君子亦息焉 小人亦

これに休す

休焉

も者亦也。

惜いかな 吾その進むを見て 未だ其

惜哉 吾見其進而未見

止まるを見ず

其止

嗚呼 曾て 泰山は 林放に如かざる

兩文比較圖

——者東語之與華之一字相當之符
 ○○者可示華之作用字之位置

可	當	宜	須	應	不可	非可	非所可	不	不可	不可	不得不	不能	非不	欲不	將不	可非不	莫不	可無不	使	可使	不可使	不使	非使	不可不使	不得不使	不能使	不得使	無使	被	
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
べし	べし	べし	べし	べし	べからず	べきにあらす	す	ざるべし	ざるべし	ざるべし	ざるを得ず	ざることを能はず	ざるにあらす	ざらんと欲す	ざらんとす	ざるにあらざるべし	ざることをなし	ざることをなかるべし	しむ	しむべし	しむべからず	しめず	しむるにあらす	しめざるべし	しめざるべからず	しめざるを得ず	しむる能はず	しむるを得ず	しむることなし	らる
有	無	可有	可無	不有	不無	非無	非有	不可有	不可無	在	非	不在	非在	不可在	非可在	如	不如	况	豈可	豈不可	奚	雖	雖不	雖可	雖不可	縱雖	若	既		
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
あり	なし	あるべし	なかるべし	あら	なく	なき	ある	あるま	なくん	にあ	にあ	にあ	にあ	にある	にある	ごと	如く	況ん	豈	豈	奚ぞ	とい	す	べけれ	べけれ	べから	ならは	しか		

兩文比較圖

當	宜	須	應	不可	非可	非所可	不	不可	不得不	不能	非不	欲不	將不	可非不	莫不	可無不	使	可使	不可使	不使	非使	不可不使	不得不使	不能使	不得使	無使	被	可被	不可被	欲	將
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
べし	べし	べし	べし	べからず	べきにあらず	べきにあらざるべし	す	ざるべし	ざるを得ず	ざること能はず	ざるにあらず	ざらんと欲す	ざらんとす	ざるにあらざるべし	ざることなし	ざるにあらざるべし	しむ	しむべし	しむべからず	しめず	しむるにあらず	しめざるべし	しめざるべからず	しむる能はず	しむると得ず	しむることなし	らる	らるべし	らるべからず	と欲す又ん	んとす又ん
無	可有	可無	不有	不無	非無	非有	不可有	不可無	不在	非在	不可在	非可在	如在	不如	况	豈不可	豈可	豈	豈不可	豈可	雖不可	雖可	雖不	雖可	縱雖	若	既	不	非	不	可
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
なし	あるべし	なから	あら	なく	なき	ある	あるま	なくん	にあ	にあ	にあ	にある	がと	如く	況ん	豈○	豈○	豈	豈○	豈○	べからず	べし	す	べし	た	なら	しか	す	にあ	ざる	へき

—者東語之與華之一字相當之符

○○者可示華之作用字之位置

可○○

有○○

あり

當○○

無○○

なし

宜○○

可有○○

あるべし

須○○

可無○○

なかるべし

應○○

不有○○

あらず

不可○○

不無○○

なくんばあらず

非可○○

非無○○

なさにあらず

非所可○○

非有○○

あるにあらず

不○○

不可有○○

あるまじ

不可不○○

不可無○○

なくんばあるべからず

不得不○○

在○○

にあり

不能不○○

非○○

にあらず

非不○○

不在○○

にあらず

欲不○○

非在○○

にあるにあらず

將不○○

不可在○○

にあるべからず

可非不○○

如○○

にあるべきにあらず

莫不○○

不如○○

如くならず

可無不○○

况○○乎

況んや

使○○

豈可○○哉

豈○○べけんや

可使○○

豈不可○○哉

豈○○べからんや

不可使○○

奚○○

奚ぞ○○○ざる

不使○○

雖○○

もししともし

非使○○

雖不○○

すとしともし

可不使○○

雖可○○

べけれん

可不使○○

雖不可○○

べからずんべし

得不使○○

縱雖○○

たしひ○○○すしと

不能使○○

○○則○○

ともしは

不得使○○

若○○則○○

ならば

無使○○

既○○則○○

しかば

被○○

不○○乎

にあらざるか

可被○○

不可被○○

と欲す又ん

不可被○○

○○也

欲○○

○○也

宜	○	べし
須	○	べし
應	○	べし
不可	○	べからず
非可	○	べきにあらず
非所可	○	べきところにあらず
不	○	ず
可不	○	ざるべし
不可不	○	すんばあるべからず ざるべからず
得不	○	ざるを得ず
能不	○	ざることを能はず
非不	○	ざるにあらず
欲不	○	ざらんと欲す
將不	○	ざらんとす
非不	○	ざるにあらずべし
莫不	○	ざることをなし
無不	○	ざることをなざるべし
使	○	しむ
可使	○	しむべし
可使	○	しむべからず
不使	○	しめず
非使	○	しむるにあらず
不使	○	しめざるべし
不使	○	しめざるべからず
能使	○	しめざるを得ず
能使	○	しむる能はず
得使	○	しむるを得ず
無使	○	しむることなし
被	○	らる
可被	○	らるべし
可被	○	らるべからず
欲	○	と欲す 又ん
將	○	んとす 又ん

可有	○	あるべし
可有	○	あらん
可無	○	なかるべし
可無	○	なからん
不有	○	あらず
不無	○	なくんばあらず
非無	○	なきにあらず
非有	○	あるにあらず
不可有	○	あるまじ あるべからず
不可無	○	なくんばあるべからず
在	○	にあり
非	○	にあらず
不在	○	にあらず
非在	○	にあるにあらず
不可在	○	にあるべからず
非可在	○	にあるべきにあらず
如	○	ごととし
不如	○	如くならず
况	○	況んや
豈可	○	豈
豈不可	○	豈
奚	○	奚ぞ
雖	○	と
雖不	○	すと
雖可	○	すべし
雖不可	○	べし
縱雖	○	た
則	○	ば
則	○	ば
若	○	ならば
若	○	ならば
既	○	しかば
不	○	乎
非	○	乎
不	○	なり
不	○	なり
可	○	也
可	○	也

泰東同文局協修
大日本國文部省補助委員 大矢透著
大清國浙江省鎮廣言校

日本文典課本

全一冊

大清國駐日公使 楊樞 序文
大日本國敎育院議員 伊澤修二著
大清國欽賜二等雙龍寶星
大清國使署書記官 張元節閱
大日本國實業博覽會教授 三屋大四郎譯

教育學

全一冊

大日本國振武學校編輯
泰東同文局譯補

日本文言課本

全六冊

泰東同文局協修
大日本國東京府高等女學校教頭 瀧美銳太郎著
泰東同文局編譯

理化學階梯

全一冊

大日本國敎育院議員 伊澤修二閱
大清國順天府李儀校補
泰東同文局撰

清韓語學書

近全一冊

大日本國敎育院議員 伊澤修二著
大日本國法政大學 法學博士 高橋作衛著

萬國公法提要

近全一冊

各種圖籍著譯印行發售

各種教育儀器標品文具製造發售

大日本東京 泰東同文局

大清國上海 泰東同文局上海分局

大清國天津 泰東同文局天津分局

